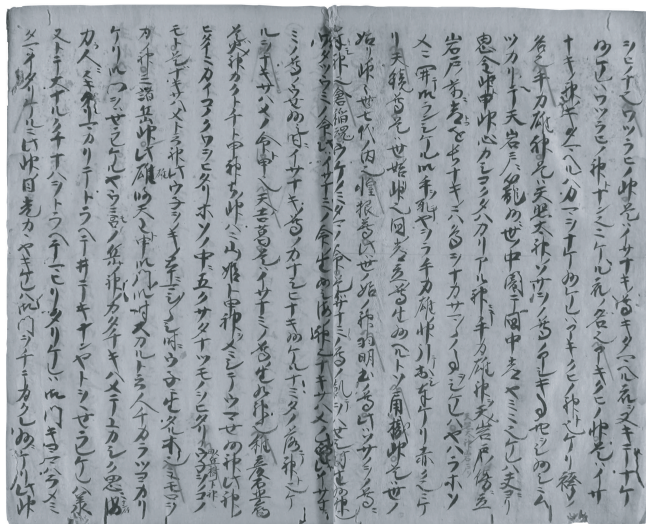




一 日本紀鈔 にはんぎしょう

図書館所蔵、貴重書一一三号。写本一冊。仮結綴。後補白素紙表紙。縦二六・五糎、横一八・二糎。本文巻頭に「日本紀鈔 上」とあり、下隅に「少納言入道作物」とある。本文首葉に「國學院大學図書館蔵」の印記あり。尾題には「日本紀鈔下」とある。墨付二十九丁。料紙は斐楮交漉。蝕損部に修補がみられ、この時綴じ直しが行われ、上下二冊であつたものを一冊仕立てに改めたものと考えられる。

※

※

本文巻頭の下隅「少納言入道作物」の記述は信西（藤原通憲。嘉承元年・一一〇六〜平治元年・一一五九）を指す。信西は平治の乱の重要人物として有名であるが、その家は曾祖父以来学問の家として知られており、祖父は大学頭、父も文章生出身の藏人であつた。通憲自身も経学・易・天文等に精通しており、『信西古楽図』『法曹類林』『本朝世紀』等の著書がある。彼は天養元年（一一四四）、少納言に任ぜられ、また出家入道し、円空と称し後に信西と称した。その信西の講説を記録した『日本書紀』の注釈書が『日本紀鈔』であるが、現在伝わる『書紀』の注釈としては『日本記私記』に次いで古いものである。また、鎌倉時代初期に成立した歌学書や真言宗天台宗に関わる仏教書籍に逸文がみられることから、成立してすぐに歌学、仏教の世界に伝わっていたことも特徴として理解

される。

写本には奥書がなく書写年代を明確にすることはできないが、室町時代のものと考えられている。同系の写本等はなく、異本として賀茂別雷神社・三手文庫本『日本紀音義』が唯一あるのみであり、貴重な書籍といえる。

本文は上下六つの部立てで構成され、上は天・地・草（木）・神・人で、下は雑（更に物部・所名・詞・鳥獸・魚虫に分類されている）から成る。上下それぞれの始めに、各部を網羅した目録を立て、次にその目録の語彙を部立の順を追って注釈する方法を採っている。目録には番号が付されており、上下を通じて三百五項目からなることが一目瞭然である。その対象は『日本書紀』のほぼ全てを覆っているが、神代巻上下からの採取が多く神代巻尊重の程度を推し測ることができ、また作者が説話の部分に関心を示していることがうかがえる。

（鈴木聡子）

【所収本】

中村啓信『信西日本紀鈔とその研究』高科書店、平成二年（一九九〇）

【参考文献】

右所収本参照